

## つながりの強さと負の感情が利他的懲罰に及ぼす影響

- コロナ渦におけるつながりの在り方の再検討 -

伊藤暢<sup>a</sup> 横井恵人<sup>b</sup> 米杉拓真<sup>c</sup>

### 要約

本稿は、他者とのつながりに着目し、特に、若者が悩みを抱えた際に、助けを求めることができるつながりや他人には言えない本音を話せるつながりを構築するための効果的な手段を示唆する研究である。本研究では、コンフリクト発生時における他者とのつながりの強さの度合いによって、怒りや妬みという負の感情が、利他的懲罰にどのような影響をもたらすのかを公共財ゲームを想定したサーベイ実験を用いて検討する。結論として、つながりが強い方が怒りの感情が強く、貢献度の乖離が大きい方が怒りの感情が強いことがわかった。また、怒りの感情が強い方が利他的懲罰への影響が大きいということもわかった。

JEL 分類番号: C91, D03, D91

キーワード: つながり, 利他的懲罰, 負の感情, 公共財ゲーム

---

a 伊藤暢 同志社大学商学部 cgfc0185@mail3.doshisha.ac.jp  
b 横井恵人 同志社大学商学部 cgfc0742@mail3.doshisha.ac.jp  
c 米杉拓真 同志社大学商学部 cgfc0749@mail3.doshisha.ac.jp

## 1. イントロダクション

COVID-19により、対面や移動を避ける生活様式が構築され、人間が本来持つ、社会的なつながりに変化をもたらしている。従来、人は社会と関わりながら、さまざまな集団に所属し、離脱や新たな集団形成を行う。内閣府(2017)によると、特に、進学や就職などのライフステージの移行時やそれに伴う環境の変化の中でさまざまな問題に直面する若者にとって、家庭、学校、地域等における「人とのつながりのありよう」は、若者自身が社会的な成長を遂げ自立していく上で大きな影響を与える要素と考えられている。しかし、他者とのつながり、生きていく中で、メンバー間の目標の相違や視点・考え方の違いなどからコンフリクトが発生することがある。コンフリクトは、衝突や対立などを指し、ネガティブな印象を抱かれやすいが、コンフリクトを解決することで、人間関係が改善され、メンバーの問題解決の探求心を刺激し、チームの結束と活動が高まる場合がある。また、率直に意見を述べ合えるチーム形成に役立つ場合もある。さらに、コンフリクトのマネジメントに成功すると、チーム内の生産性が向上し、職場関係が良好になるという長所もある(松尾,2016)。

一方で、Averill(1983)は、友人や恋人、家族などの親密な関係において怒りが生じやすいとした。これは、親密であるだけに不正を見逃せないことや、相手の行動に対する期待や欲求が大きいことなどを挙げている。このことから、相手との関係が親密であるほど、不正や期待はずれを原因とする怒りの表出、被表出が多くなると考えられる。また、怒りの感情は、親密な他者に向けられやすいという特徴がある(Averill, 1982; Clark and Finkel, 2005)。上原・森・中川(2018)によると、怒りという感情を外部に表す行動は、相手を信頼し、自分に起こった不都合や満たされない欲求を解消してほしいという内面情報を打ち明けるものであるとされる。

また、Fehr and Gächter(2002)は、利他的懲罰が協力行動を説明するための重要な手段であることを示している。利他的懲罰とは、懲罰にコストがかかり、物質的な利益をもたらさないにもかかわらず、個人が罰することである。この研究では、人間は遺伝的に無関係でしばしば大規模なグループにおいて二度と会うことのない他人と、評判を得るための利益が少ない、もしくはない場合、利他的懲罰が可能なときに、協力が頻繁に促進されることを懲罰のある公共財ゲームを用いて実証している。また、利他的懲罰の背後には、相手に対する負の感情が存在することが示されている。負の感情とは、相手との相互行為やコミュニケーションの過程で発生する怒りなど主観的に好ましくない否定的な感情としている(畠山・佐々木・米山,2016)。利他的懲罰を行う規定要因として、Fehr and Gächter(2002)では怒り、柴田(2020)では妬みが挙げられているため、本研究では、負の感情を怒りと妬みに限定して述べる。ここでいう怒りは「自己が想定していることとは異なる出来事や扱い方をされた時に、期待と現実との不一致が生じることで喚起される感情」、妬みは「自分が享受したいものを享受している人間に対する憎しみの感情」と定義し、利他的懲罰を行う規定要因とする。

上記をふまえ、私たちは他人とのつながりの強さの度合いによって、非協力者に対する負の感

情が、利他的懲罰に影響を与えるのではないかと考えた。

そこで、本研究における、前提条件を下記のように定義した。コンフリクトは、複数のメンバーで構成し、活動を行う組織におけるコンフリクトとし、「組織内で発生する対立」と定義する。強いつながりと弱いつながりは、The Strength of Weak Ties (Granovetter,1973)と、内閣府(2017)の資料より、強いつながりを「家族や友人など、直接関わりがあり、多くの共通の知り合いがいる人たちとのつながり」、弱いつながりを「インターネット上で知り合った人など、直接関わりがなく、ほとんど共通の知り合いがいない人たちとのつながり」と定義する。

以上の記述より、以下のように仮説を立てて検証する。

仮説①:コンフリクト発生時において、弱いつながりよりも強いつながりの方が負の感情(怒り)が強い。

仮説②:コンフリクト発生時において、弱いつながりよりも強いつながりの方が(負の感情が強い方が、)利他的懲罰を選択する割合が大きい。

仮説③:強いつながりの方が怒りの感情による利他的懲罰への影響が大きい。

## 2. サーベイ実験

本実験は、つながりの強さの程度が利他的懲罰に与える影響を懲罰のある公共財ゲームをweb 調査サイト Google Forms を用いて行った。回答者に提示したシナリオは以下の通りである。サーベイ実験は「A:強いつながり条件」、「B:弱いつながり条件」の2種類行った。それぞれ、投資額の乖離が大きいケース、小さいケースを提示し、シナリオ読後、非協力者に対する怒り、妬みの感情の度合いを7件法リッカート・スケール、非協力者に対する利他的懲罰の有無を2項選択法で回答してもらった。怒りは平井(2016)、鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬・坂野(1997)、妬みは、津田・藤井(2016)、RH. Smith et al(1999)を参考とし、具体的な質問項目は表1に示す。その後、個人属性として優しさを7件法リッカート・スケールで回答してもらい、優しさは、金子・村井(1997)、山田(2004)を参考とした。

### [シナリオ内容]

A.あなたは、直接関わりのある共通の友人3人とあるプロジェクトを立ち上げました。  
B.あなたは、直接関わりのないインターネット上で知り合った3人とあるプロジェクトを立ち上げました。

共通のシナリオ:  
「このプロジェクトはあなたを含めた4人で投資を行って進めていくものです。4人の投資額の合計額が多いほど多くのお金がもらえますが、全員に均等に分配するため、投資額が多いからといって自分が得をするとは限りません。」

投資の乖離額が大きいケース  
「あなたはプロジェクトに1,600円を投資することに決めました。2番目のメンバーが1,400円、3番目のメンバーが1,800円を投資します。4人目のメンバーが200円をプロジェクトに投資したとします。」

投資の乖離額が小さいケース  
「あなたはプロジェクトに500円を投資することに決めました。2番目のメンバー300円、3番目のメンバーが700円を投資します。4人目のメンバーが200円をプロジェクトに投資したとします。」

各サーベイは、各被験者の誕生日(偶数月,奇数月)によって振り分けた。実験実施期間は、2021年9月12日から9月16日とし、最終的なサンプルサイズは、196である。被験者の平均年齢は、21.5歳(SD=1.42歳)、男性108名、女性88名である。分析する際、内閣府(2019)の調査対象者との整合性を図るため、30歳以上のデータは省いている。

表1 実験で用いた質問項目と各項目の信頼係数

<p><b>怒り</b> <math>\alpha = .93</math></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>-腹が立つ</li> <li>-イライラする</li> <li>-怒りを感じる</li> </ul> <p><b>妬み</b> <math>\alpha = .84</math></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>-羨ましく思い、悪意を感じる</li> <li>-この人の成果を見るとムカつく</li> <li>-少ない投資額で同じ分配金をもらってるのを見ると、とても悔しい</li> </ul>	<p><b>優しさ</b> <math>\alpha = .61</math></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>-他人を思いやる心や優しさを持っている</li> <li>-人と接するときは、相手のことを第一に考える</li> <li>-人の都合に合わせて、人を優先に考える</li> <li>-不愉快に感じて多少のことでは怒らない</li> </ul>
--	---

### 3. 結果

結果について、各条件の記述統計量を表2に示し、仮説をもとに述べる。まず、仮説1について、独立変数をつながり**の強さと投資額の乖離の大きさ**、従属変数を怒りの度合いとする二要因分散分析を行った。分析結果を図1に示す。その結果、つながり**の強さの主効果**( $F(1,387)=87.108, p<.001$ )、及び投資額の乖離の大きさの主効果( $F(1,387) =11.365, p<.001$ )は有意であったが、つながり**の強さと投資額の乖離の大きさの交互作用**( $F(1,387)=0.429, p<.513$ )は有意でなかった。この結果より、つながり**の強さの主効果に有意が見られたことから、仮説1は支持された**。次に、仮説2について、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、有意差は見られなかった( $\chi^2(1)=0.392, p=.531$ )。つながり**の強さの違いと利他的懲罰の有無に関連が見られなかったため、仮説2は棄却された**。最後に、仮説3について、二項ロジスティック回帰分析を行った。表3は、怒り・妬み等を説明変数とし、利他的懲罰の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果をまとめたものである。この結果、怒りは強いつながりにおいて利他的懲罰と有意に関連しているといえる( $p<.010$ , オッズ比=2.122, 95%信頼区間 1.228-3.667)。また、弱いつながりでは、妬み( $p<.100$ , オッズ比=2.222, 95%信頼区間 0.963-5.131)と性別( $p<.050$ , オッズ比=6.525, 95%信頼区間 1.524-27.928)に有意が見られるため、妬みと性別が弱いつながりにおける利他的懲罰と有意に関連しているといえる。その結果、強いつながりにおいて怒りに有意が見られ、オッズ比も大きいことから、仮説3は支持された。

表2 各条件における記述統計量 ※括弧内は標準偏差

	サンプル数	怒り	嫉妬	優しさ	罰する割合(人数)
A・乖離大きい	99	4.31(1.595)	4.253(1.498)	4.914(0.965)	18.18% (18人)
A・乖離小さい	99	2.694(1.479)	2.902(1.542)	4.914(0.965)	3.03% (3人)
B・乖離大きい	97	3.797(1.737)	3.887(1.514)	5.119(0.892)	11.34% (11人)
B・乖離小さい	97	2.337(1.367)	2.488(1.352)	5.119(0.892)	5.15% (5人)

表3 利他的懲罰の規定要因 (二項ロジスティック回帰分析)

独立変数	従属変数			
	強いつながり の利他的懲罰 ダミー		弱いつながり の利他的懲罰 ダミー	
	偏回帰係数	オッズ比	偏回帰係数	オッズ比
怒り	0.752**	2.122	0.254	1.289
妬み	0.035	1.035	0.799+	2.223
優しさ	-0.117	0.890	0.053	1.054
性別 (男性1、女性0)	0.427	0.652	1.876*	6.525
年齢	0.066	1.069	-0.309	0.734
(定数)	-6.155	0.002	-1.619	0.198
N	198		194	
AIC	121.29		86.824	

注：+：p<0.10, \*：p<0.05, \*\*：p<0.01, \*\*\*：p<0.001

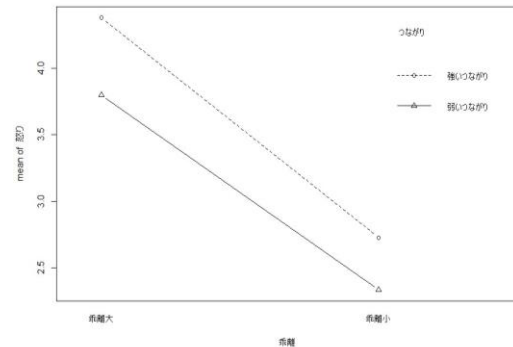


図1 二要因分散分析結果

#### 4. 考察

今回の結果から、強いつながりの方が非協力者に対する怒りの感情が強いことが分かった。また、ロジスティック回帰分析により強いつながりの場合では怒りに有意、弱いつながりの場合では妬み・性別に有意が見られたことから、つながりの強さによって利他的懲罰を行う規定要因となる感情が異なると解釈できる。しかし、本研究において利他的懲罰を行った人数が少ないことから、若者は利他的懲罰をそれほど行わない傾向にあると考えられる。この要因として、他者からの否定的な評価を回避することが考えられる。菅原(1986)は、否定的な評価を回避することも人が他者と共に生きていく中では重要な目標となり得ると述べている。つまり、他者に懲罰を与えることにより、自分自身が否定的な評価を受けると考えたため、利他的懲罰を行った人数が少ないと考える。青年期において、親密で自立的である友人関係を築くためには自分の本音を率直に伝え、友人の本音を受けとめることが求められる(柴橋, 2001)。しかし、若者が悩みを抱えた際に、助けを求めることができるつながりや他人には言えない本音を話せるつながりを構築する過程において、障害になっていると推察した。さらに、弱いつながりにおいて、妬みに 10%有意が見られたことは、COVID-19の影響による自粛警察の行動を今回の結果を用いて説明できる可能性がある。自粛警察の言動を利他的懲罰に置き換えた場合、「なぜ自分だけが我慢して、我慢していない人がいるのか」という相手への妬みが自粛警察の行動を説明できる可能性がある。

#### 5. 研究の限界と展望

本研究の限界として、日常的に利他的懲罰をする機会がないことから、結果に影響を及ぼした可能性が考えられる。

今後の展望として、本研究は、利他的懲罰やその規定要因となる感情に着目したため、ワンショットのサーベイ実験を行った。懲罰のある公共財ゲームは本来、複数回繰り返し試行し、協力行動を測るため、今後は、ワンショットではなく、複数回繰り返し試行する協力行動について検証していきたい。また、COVID-19により学校や職場でオンラインを推奨していることから、学校の友人や職場のつながりに変化があると考えられる。今後は、若者に限定せず広い人々のつながりの強さが変化することを考慮したうえで、つながりを再考する必要がある。

#### [引用文献]

- Averill, J.R.,1983. Studies on anger and aggression: Implications for theories of emotion. *American psychologist* 38.11 : 1145.
- Clark, M.S., and Eli J. F., 2005. Willingness to express emotion: The impact of relationship type, communal orientation, and their interaction. *Personal Relationships* 12.2 : 169-180.
- Fehr, E., and S. Gächter, 2002. Altruistic punishment in humans. *Nature* 415.6868 : 137-140.

- Granovetter, M.S., 1973. The strength of weak ties. *American journal of sociology* 78.6 : 1360-1380.
- 畠山朋子,佐々木久長,米山奈奈子,2016.看護師の患者対応場面での怒り発生とその後の行動.
- 平井花.2017.主観的感情特性尺度の作成 : 基本感情に基づく感情特性尺度の信頼性・妥当性の検討. *人文* 15 : 83-97.
- 金子邵加榮, 村井仁. 1997. 現代青年におけるやさしさの構造に関する分析的研究. *生涯学習研究と実践.金沢大学教育学部紀要* 46,177-191
- 松尾 智之, 2016 コンフリクトマネジメントに対する考察  
<https://www.exa-corp.co.jp/technews/technews/files/EXR-2016-02.pdf>
- 内閣府, 2017. 若者のつながり調査 (平成 29 年)  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0\\_0.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html)
- 内閣府, 2019. 子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf-index.html>
- 澤田匡人, 藤井勉. 2016. 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか?—— 良性妬みに着目して——. *心理学研究*, 87(2), 198-204.
- 柴橋祐子, 2001. 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち. *発達心理学研究* 12.2: 123-134.
- 柴田健志, 2020. 公正な社会への抵抗: スピノザと行動経済学. *鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集, Cultural science reports of Kagoshima University* 87 : 27-34.
- Smith, R. H., Parrott, W. G., Diener, E. F., Hoyle, R. H., & Kim, S. H. 1999. Dispositional envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25(8), 1007-1020.
- 菅原健介, 1986. 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 -公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について-. *The Japanese Journal of Psychology* 57.3 : 134-140
- 鈴木伸一,嶋田洋徳,三浦正江,片柳弘司,右馬埜力也,坂野雄二.1997. 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討. *行動医学研究* 4.1 : 22-29.
- 友野典男, 2006. 行動経済学-経済は「感情」で動いている-. 光文社, 日本
- 上原俊介,森丈弓,中川知宏, 2018. 親密な関係における怒りの感情表出と効果: 生存時間分析による検討. *実験社会心理学研究* : 1708.
- 山田亮. 2004. 組織キャンプにおけるベネフィット・グメンテーションの検討. *北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要* 7,59-69.